



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第22主日 A年(2023年9月3日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 20章7—9節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 12章1—2節

福音朗読：マタイによる福音書 16章21—27節

イエスさまのころ

三つの朗読から

第一朗読は嘆くエレミアのころが表れます。しかし、いくら嘆いても、預言者の心の中に与えられた神のみことばは消えることはありません。「その言葉は私の心の中、骨の中に閉じ込められて、火のように燃え上がります」(エレ20章9節 フランシスコ会訳)。エレミアは人々から笑いのものとされ、あざけりを受けるのを嫌がりました。しかし、そんな人間的な思いをはるかに超えて、神のみことばはまるでマグマのように彼の中で燃え上がるのです。そして彼を突き動かします。「あなたの勝ちです」(7節 同)、「わたしは疲れ果てました。わたしにはもうできません」(9節 同)は、神にすべてを委ねようとするエレミアの心情を表しています。

第二朗読も同じように神の御心に適う生活をすべきだとパウロは説きます。そのためには自分自身を神に喜ばれる生けるいけにえとして献げるといふ礼拝が必要ですし、同時に神の御旨をわきまえることが必要となります。

福音朗読では、せっかく父なる神のおかげで「あなたはメシア、生ける神の子です」(マタ16章16節 新共同訳)と告白したペトロが、イエスさまのこれから行く道を理解できず、人間的な理解で済まそうとします。それに対して、イエスさまは「十字架を背負って、わたしに従いなさい」(24節 同)と諭しています。

イエスさまの十字架の道に従うとは、神のこばに魅せられたエレミアと同じようにイエスさまに魅せられて、自分を聖なる生けるいけにえとして奉獻しつつ、しかも自分自身を捨てて生きていくことなのです。

説教：イエスさまのころ

十字架に向かうイエスさまのころを知るために、福音朗読にある16章21節の三つの言葉に注目してください。「このときから」、「打ち明ける」、「復活することになっている」の三つです。「このときから」は4章17節にもあります。ただし、新共同訳は「そのときから」。フランシスコ会訳はどちらも「この時から」です。『「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた」(4章17節 新共同訳) イエスさまは、今度はお弟子さんたちだけにご自分の死をそつと打ち明け始めます。

「打ち明ける」(デイクニューミ)には、大きくわけて二つの意味があります。一つは「指し示す、見せる、知らせる」です。次に「明らかにする、証明する」です。ここでは後者の意味で使われているでしょう。

ところで、イエスさまによる受難予告は三回あります(16章21節、17章22-23節、20章18-19節)。イエスさまに危害を与え、苦しめるのは一回目の予告では「長老、祭司長、律法学者たち」ですが、二回目の予告では「人々」(22節：人の子は人々の手に引き渡されようとしている)となり、三回目の予告では「異邦人」(19節：異邦人に引き渡す)と変化していきます。イエスさまの死がユダヤ人の指導者たちから、一般の人々、そして異邦人も巻き込んだものであることが明確になります。つまり、イエスさまの死の責任は実は異邦人であるわたしたちと無関係ではないのです。

「復活することになっている」は、二通りの理解の可能性ががあります。「必ず…べきこと」と理解して、イエスさまが受難と死、復活の出来事に対して運命のように受け身で理解しているというものと、「…ねばならない」と理解して、イエスさまが神さまの御旨にかなう出来事として受難、死、復活を捉えているというものです。「しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう」(26章54節)とイエスさまは仰っていますから、神さまの想いのご計画の中で、イエスさまはやがてくるご自分の受難、十字架での死、復活を受けとめているのでしょう。

お知らせ

9月4日～9日は、修道院の朝のミサはありません。

10月29日は、「交わりのミサ」として、ミサの時間は7時と10時半だけです。